

国立大学法人千葉大学学長の業績評価結果について

学 長：徳 久 剛 史

任 期：平成29年4月1日～令和3年3月31日

評価期間：平成29年4月1日～平成31年3月31日

【評価結果】

国立大学法人千葉大学学長選考会議は、国立大学法人千葉大学学長の業績評価に関する要項に基づき、平成29年度及び平成30年度における徳久剛史学長の業績評価を実施しました。

5月16日開催の学長選考会議において、学長の業績評価の実施手順等について確認するとともに、業績調書に記載された基本方針、大学運営、教育、研究、社会連携・社会貢献、国際化、附属病院、附属学校及びその他の各項目に係る業績について、6月5日まで書面による審査を実施しました。

6月24日開催の学長選考会議において、徳久剛史学長へのヒアリング及び監事との意見交換を行い慎重に審査・検討した結果、非常に優れているとの結論に至りました。

令和元年6月24日

国立大学法人千葉大学
学 長 選 考 会 議

様式 2

業績調書に係る審査結果（集計）

評価項目	評価
1 基本方針	4.6
2 大学運営に関する事項	4.4
3 教育に関する事項	4.8
4 研究に関する事項	4.6
5 社会連携・社会貢献に関する事項	4.2
6 国際化に関する事項	4.7
7 附属病院に関する事項	4.1
8 附属学校に関する事項	3.7
9 その他	3.9

※評価は、各委員による評価の平均値を示す。

【評価及び評価内容】

評価	評価内容
5	期待を大幅に上回る業績をあげている／非常に優れている
4	期待を上回る業績をあげている／優れている
3	期待する程度の業績である／良好である
2	期待する業績を下回っている／やや努力を要する
1	期待する業績を大幅に下回っている／努力を要する

【特筆すべき事項】 P2～P8

委員 A

1. 基本方針

- 以下の各論の評価のように、千葉大学は教育、研究、運営のいずれにおいてもめざましく進展している。

2. 大学運営に関する事項

- 昨年度の生命医学系、理工学系に引き続き、2018年度には、園芸学系教育系の組織改革を進めた。千葉大学の教育組織がこれらの組織改革により、大きくくり化され、より広い視点から教育を進められるようになったことは高く評価できる。
- ガバナンス強化のため、昨年引き続き副学長を増員した。確かにガバナンスは強化されるであろうが、有能な教員が、運営により多くの時間を使い、教育研究に支障が出ないよう、注意して欲しい。
- 救急外来受付、休院時の見舞いなどの入り口が分かりにくく粗末すぎるのではないか。

3. 教育に関する事項

- 昨年に続き、入学希望者が全国立大学中1位になったのは、非常に高く評価できる。どの大学を受験するかは、受験生本人の希望と保護者の信頼によって決められることを考えると、千葉大学がいかに信頼されているかがよく分かる。
- 文科省のリーディング大学院に採用された免疫プログラムなど多くの独特のプログラムを立てた教育担当者の企画力、実行力に敬意を表する。
- 入学した学生は、専攻が変えられないのではなかろうか。学生の立場から考えて、専攻の変更を可能にする制度を考えて欲しい。

4. 研究に関する事項

- ニュートリノ、植物分子科学、天文学、肺線維化などで、世界の注目を浴びるような研究成果がでている。徳久執行部が力を入れてきた独自の研究を育てる努力が結びつつある。

5. 社会連携、社会貢献に関する事項

- 地方創成戦略研究推進センターを設置し、人社系を含め、全学的な地域貢献が大きく進歩した。

6. 国際化に関する事項

- 特に学生の国際化(日本からの留学、海外からの留学)に力を入れていることがうかがえる。今後は外国人教員の増加、英語授業についても進めて欲しい。

7. 附属病院に関する事項

- 研究面では、難病ギラン・バレー症候群に新しい治療法を開発したのは大いに評価できる。法医学教室が児童虐待に踏み込んで提言しているのも、法医学の新しい動きとして高く評価したい。

- 画像の見落としが問題になった。画像診断結果の迅速化し、主治医が画像を診るときにはすでに画像診断医の報告が届いているようになればと思うが、人的資源の問題があることは理解できる。

8. 附属学校に関する事項

- 千葉県教育委員会と連携して、大学附属小中学校の位置づけを常に考えていくことが大事である。
- 教育学部がいじめ問題に積極的に関わるようになったことは高く評価できる。

9. その他

- 積極的に新しい試みをしている反面、毎年新聞に報道されるような不祥事がでるのは非常に残念である。

委員B

- いま徳久学長は、運営交付金の削減について、大学がその知を公益のために外に出し、自らもそれに裨益するような機能改革を行わなければ増加は望めないのご認識と思う。これは教職員と分かち合われていて、その成果が近年顕著な産学、地域等との優れた提携活動である。その間外国の教育研究機関との最先端分野における共同活動等国際化も顕著である。これらは、学長からご提出のあった“業績調書”に詳しい。なお、“共働体制”の活力にかかわらず、不足する人件費事情もあって、学長はじめ全教職員のご心労を伴う肉体的負担を思うものである。
- 附属病院では、例えば、医工学部門と協力、関係業界のため病院の見学会を実施するなどして、新医療機器開発のための協力研究に着手している。また、児童虐待対処のため“臨床法医学外来”を設置した。臨床については、その“究極に人権への配慮”という学長の戒めがある。研究ではたとえば世界最先端の医薬分野の成果が権威有る専門誌“The Lance Neurology”に掲載された。
- 教育研究の国際化の基軸は、人事交流だと思う。この度国際教養学部の成功をも踏まえ学部・大学院全学生の留学を目指しての体制準備は見事である。このように、今後とも益々多くの学生教職員（家族を含む）が広く外国で生活することとなるが、全ての海外拠点を一元的に把握するため“グローバル・キャンパス推進基幹”が設置された。これは、安全面を含め大学と在外大学関係者との紐帯を強めるもので歓迎したい。また、大学がJTBとの協定で関係者の渡航の際保険の手続き等で支援することは素晴らしい。大学の暖かさを感じる。
- 最近ある全国紙が“令和に知をひらく”と題する何人かの知識人とのインタビュー記事連載を企画、第一回目は脳学者が“意識の移植が問う倫理”として“不老”の意味を語っている。“科学と倫理“といえ、学長は大学の基本目的のひとつに“文理の枠を超えた融合型研究の推進“を挙げておられ、実践項目の例は“心と脳の発達に関する学際的研究の推進”とさ

れている。そして、このような学際的研究教育実施に必要な学内制度上の主な整理再編は、学長の指導と各学部・部門の支持協力ではほぼ整った印象を持つ。

- この企画の最終回は“人文学 自然科学の視点”というもので、哲学者が自然を破壊してきた人間が自らの未来を考える時人文学だけでなく芸術も役にたつのではないかと説いている。芸術といえば伝統と実績で世界的地位に有る園芸学部のグループが“花と緑で元気にする”というテーマの東日本での被災地支援により政府から感謝状を贈られた。考えてみると、園芸学部と自然との創造的取り組みは芸術である。そして墨田キャンパスのコンサルティングや **Branding** に求められる感性も芸術だと感じる。このように千葉大学の令和の知の挑戦を先取りしている姿が、平成 31 年度入学志願者数国立大学一位という偉業を可能ならしめたのではないかと。徳久学長の任期はこれに重なっている。

委員 C

- 基本方針としては TOKUHISA PLAN を策定し、千葉大学の進むべき道を明確に示しており、非常に高く評価される。基本方針は内容も緻密であり、これまでエビデンスに裏付けられた実績を得ている。大学運営では、教職員による協働体制の強化、多様な人材の活用による教育研究活動の活性化及び教育組織改革、財務基盤の強化などの面で確たる成果を挙げている。ただし、リスクマネジメントシステムの構築については、今後、さらなる態勢整備が必要とされる
- 教育面では、国際教養学部を中心としてグローバル人材育成戦略が拡大し、新たに「千葉大学グローバル人材育成“ENGINE”」が策定されているほか、学修制度改革の進捗が目覚ましい。
- 研究面では、研究三峰の推進を目標に掲げ、グローバルプロミネント研究基幹の創設と着実な運用を行っており、peer review journal にも多くの論文が掲載され、着々と成果を挙げている。
- 国際化に関しても、スーパーグローバル大学等事業として「グローバル千葉大学の新生」の実施をしており、海外キャンパスの設置及び充実、学生の海外留学など、目覚ましい成果が得られている。
- 附属病院は、安全かつ安心な医療の提供、診療機能の高度化、臨床研究の機能強化などの面において成果を挙げている。ただし、臨床研究中核病院として臨床研究の質の向上に向けてのさらなる努力が必要である、また、附属病院職員の質の標準化と充実の面においてもさらなる努力が求められている。しかし、これらの課題も果敢に挑戦をし、課題を克服すべく改革中を断行している。

委員D

- 千葉大学グローバル人材育成“ENGINE”を策定し、令和2年度から実施することを決定したこと「大学運営に関する事項、教育に関する事項」は、学長のグローバル人材育成戦略に対する強い思いが反映されたものであり、高く評価できる取り組みである。
- 文部科学省の平成30年度大学の世界展開力強化事業にCOILを使用した日米ユニーク・プログラムが採択されたこと「教育に関する事項」は、今後の本学と米国の大学との連携を強める上で重要な業績であると評価できる。
- 学部入試の志願者数が4年連続で国立大学1位になったことが「教育に関する事項」において特に評価できる成果である。
- グローバルプロミネント研究基幹のプロジェクトリーダーが特別推進研究に採択されたこと、さらに関連研究成果がScienceに掲載され、その年の大発見10テーマの3位に選出されたことが「研究に関する事項」において特筆に値する業績である。さらに産学協同プロジェクトがJSTのOPERAに採択されたことも高く評価できる。
- 「附属病院に関する事項」では、ギラン・バレー症候群の新有効薬を発見したことと千葉県から救命救急センターに指定されたことが附属病院のネームバリューを上げる重要な成果であると思われる。
- 「その他」の記載事項では、ミツバチプロジェクトや特別栄誉教授称号の制定、環境ISOの環境報告書が環境省の賞を受賞したことが本学のプレゼンスを高める上で評価できる成果である。

委員E

- 大学運営に関して：ガバナンス機能の強化として、毎年、副学長の増員や役割の見直しを実施し、多様な課題への対応力や戦略を推進するための体制強化を図っていることは評価できる。
- 教育に関して：平成29年度にツイン型学生派遣プログラムが最高評価を受けた実績の上に、千葉大学グローバル人材育成“ENGINE”の実施を決め、承認を受けたことは評価できる。一方で実施にあたっては、渡航先や安全の確保、学習を深化させる仕組みづくり、社会人など多様な立場にある大学院生や様々な健康問題をもつ学生への、多様な対応策など整備すべき点が多いと考える。4年連続で学部志願者数が国立大学1位となったことは評価できる。“ENGINE”の実施や学費の値上げの影響がどのように影響してくるのか注意深く見守っていく必要がある。
- 研究に関して：平成30年度は、「GP研究部門」および「次世代研究インキュベータ」における研究成果が国際誌への掲載や受賞、大型研究費獲得につながった点は、大きく評価できる。
- 社会関係・社会貢献に関して：市や企業などとの提携が増加しており、

これらが千葉大学の強みを生かした具体的な活動や成果、寄付金受入につなげられるとよい。

- 国際化に関して：グローバルキャンパス推進機関の設置や海外派遣プログラムにおける海外保険手続き等の効率化は、今後の“ENGINE”推進にむけて大いに役立つと期待できる。

委員 F

- 基本方針

2015～21の Vision を設定し、Global、Research、Innovation、Branding、Synergy と分野を明確にし、夫々の分野で具体策を実行していることは、大いに評価できる。

- 大学運営に関しては、全学的リーダーシップを十分に発揮し、副学長を1名増員する等、ガバナンス強化策も実行している。
- SULA の全学配置を実施し、全学学生への対応強化、飛び入学の拡大などの実施を決め、教育の質の改善にも尽力した。本学のブランド力の向上のための継続的広報活動の成果で平成 30 年度入試志願者が、国立大学で 3 年連続 1 位になったことは、高く評価すべきと考える。
- 研究に関しては、「人工知能関連研究支援プログラム」の実施、「ニュートリノ観測装置アイスキューブ実験」における業績など成果を挙げた。
- 国際化に関しては、タイの大学に「千葉大学バンコク・キャンパス」の設置や「グローバル・キャンパス推進基幹」の新設などを実行したことは、評価できる。また、外派遣留学生数が国立大学で 1 位だったこと（平成 29 年）も国際化計画の成果と言える。

委員 G

昨年度から多方面にわたって新しい取り組みを計画、実現しており、国立大学法人が置かれている極めて困難な状況下において、相当な決意と行動力を持って臨んでいることがうかがえる。

特に研究面において、GP 研究部門で助成してきたプロジェクトが、千葉大学ではじめて科学研究費補助金の特別推進研究に採択されるなど、成果が具体的に実を結んでいることは高く評価できる。また、社会連携・社会貢献面において、企業や自治体と包括的連携・協定を締結し、地方創生戦略研究推進プラットフォームを設立するなど、精力的に連携を強化・推進している点も、これからの大学運営を見据えた取り組みとして高い期待を寄せることができる。

なお、教育・国際化に関しても、グローバル人材育成に関して様々な新しい取り組みが見られる。特に、“ENGINE”の策定が注目されるが、この点に関しては、これから本格的に始動する取り組みであり、評価は次回に委ねたい。

委員 H

千葉大学グローバル人材養成“ENGINE”は、他大学に例を見ない革新的な施策であり、今後の千葉大学のあり方を抜本的に変える可能性を有する。国際未来教育基幹の改革とあいまって、学長のガバナンスによる改革努力は高く評価されるべきである。また、人工知能等関連研究支援プログラムのように、先端研究の社会実装を求める研究支援策も、大学としての重点領域研究を積極的に進めようとするもので、AI 技術講座の開催ともあいまって研究水準の向上に資するものである。国際化についても千葉大学のグローバル化の推進は、千葉大学のイメージを変えるとともに、改革を推進する大学という声望を国際的にも高める効果をもたらしている。

このように大学経営は安定的に推移しており、外部資金は研究にとどまらず、運営面でも独自の取り組みに尽力するなど、財政面でも堅実な経営を行っているといえる。これらの特徴は、学長のイニシアティブによるものであり、政策判断の早さも特筆すべきと考える。

委員 I

運営費交付金が減少する中（毎年約 1.8 億）、概算要求において新規の KPI を考えるなど努力を重ねている。H31 の予算はわずかに減少したが、十分な運営費交付金を獲得しており、優れた大学運営の成果と評価できる。

全員留学(ENGINE)、授業料値上げなど経営の事を考慮しながら教育内容の高品質化を図ろうとしている。また、全員留学については教育のさらなる国際化への展開を追求するもので有り、千葉大学の強みを発揮できる方向と言え、大いに評価できる。

委員 J

教育面で、平成 30 年度・31 年度入学者選抜試験ともに志願者数が国立大学 1 位となったこと、千葉大学独自のシステムである SULA の取り組みが進展したこと、ツイン型学生派遣プログラムが事後評価で次世代スキップアッププログラムが中間評価で、それぞれ平成 30 年度に最高評価を得たことなどが特筆される。

委員 K

- 大学の運営・ビジョンは大変素晴らしいと評価します。
- 研究でも少しずつ成果が出始めて喜ばしいことです。
- 論文数だけで評価されるのには、疑問もありますが、それが評価の基準で有れば、形を整える必要があると思います。

委員 L

この間、徳久学長は（４）（５）（６）の項目について誠心誠意取り組み、国立大学の中で注目すべき成果をあげてきた。同時に、86 国立大学の中でい

ちばん多くの受験生を集めていることは、特筆大書するに値する。

委員M

学長として経験をつまれ、学内外全般への目配りが行き届き、しっかりと方針・方策をもたれて大学運営に当たっておられると思います。

【その他のコメント】 P9～P10

委員 A

- 若干の問題点をあげれば、教職員数の削減は大学の体力に関わるものであり、特に職員についてはこれまでの人事管理の枠を越えた積極的な強化策が必要ではないか。法人として教員・職員比率の見直しに着手するということも考えられる。SULA の強化のように実質化を求められる分野もある。
- 大学改革を進めていく上での旧弊であった部局中心主義は、学長の権限強化によって大幅に改善された。しかしながら、なお自己の部局や部門が大学全体において占める位置を認識していない例がまま見受けられ、大学全体の意思形成には、いっそう学長の果たす役割が大きくなるものと思量する。

委員 B

- 「千葉大学発ベンチャー企業等から対価として取得する株式等取扱規程」が制定され、大学の資金運用について選択肢が増えてきているが、運用にあたっては慎重に実施していく必要がある。
- 現在、運営費交付金等の削減が、人材確保や研究環境にも大きな影響を与えているなか、電子ジャーナルの削減検討などにおいて、各部局が大切にしているものを尊重しつつ合意を得ながら進めていく姿勢は、評価できる。

委員 C

- AI への取り組みに今以上に力を入れて欲しい。
- 大学発ベンチャーへの取り組みの更なる強化が欲しい。
- 東南アジアとの取り組みは、しっかり行っていて大いに評価できます。欧米に対しても同レベルの取り組みを更に進めてもらいたい。
- 附属幼稚園の取り組みを根本から見直すべきと思います。海外では 5 才迄の育て方が将来の知識・行動に大きく影響するとの研究発表も有ります。

委員 D

H26 年度に設置の亥鼻キャンパスの「未来医療教育研究機構」に引き続き、H29 年度に「人文社会科学系教育研究機構」及び「自然科学系教育研究機構」の設置が行われ、大学全体に学長のガバナンスが浸透する枠組みが完成した。新設の 2 機構の実質的な活動の展開が待たれる。

委員 E

本学の財務状況がここ数年大変厳しい状況となっている中、徳久学長がリーダーシップを発揮され、各種収益事業を展開している点は高く評価できます。今後も本学の収入増に向けてご尽力を頂ければと期待しております。

委員 F

(7) の附属病院に関しては、医療ミス、誤診などが連続して発生して裁判事案が発生するのみならず、多額の赤字を出している。こうした件については、断乎たる処置を取る必要があるのではないだろうか。

委員 G

今後、千葉大学の教育研究活動の状況をはじめとする千葉大学の学外への広報、紹介、地域連携、社会貢献の推進にさらに力を注いでいただけたらと思います。

委員 H

社会連携・社会貢献についても鋭意努力を行っており、成果が挙がりつつあるが、さらなる努力が必要であろう。

委員 I

AI の場合同様量子力学の分野でも国際協力等をもって指導的立場からのご活躍を期待します。